

季報

二松學舎大学附属図書館 Quarterly Report

LEARNING COMMONS

- P2 二松学舎大学での思い出 家井 眞
- P3 境界を越えて、つながっているということ 瀧田 浩
- P4 私と図書「缶」 佐藤 晋
- P5 ゼミ発表・グループ学習・模擬授業
どんどん使おう！電子黒板
- P6 北京図書館訪問記 阿部晋一郎
- P7 本学教職員著書紹介
新着図書おススメの1冊
- P8 二松学舎 140 周年記念 文豪・夏目漱石の
アンドロイド「漱石アンドロイド」が完成

No.98

2016(平成 28)年 12 月

二松学舎大学での思い出

文学部 中国文学科 教授 家井 眞

本学に於ける思い出は言葉に尽せぬ程多く、ここに書ききれない。そこで学部・大学院で受けた恩師と学恩についてその一部を記す。

加藤常賢先生（維軒、1894～1978）からは、古典を研究するために清朝考証学・文字学・民族学・宗教学等の補助学の必要性和大切さを教えて戴いた。また研究者として「自分が理解できぬからといって、他を否定してはならぬ」「研究者は謙虚でなければならぬ」（御本人はこの逆だった）とも戒められた。学部の中国思想史の授業で、出欠を取り終わってすぐ、教室を抜け出した学生を見つけると、血相を変えて教室を走り出した先生、10分後にゼムゼム言いながら帰り、教卓に寄りかかり息を整え、「馬鹿野郎が、追いつけなかったがや。君達に怒っても仕方ないんじゃが」と言いながら、あらためて出欠を取り直し、逃げ出した2人を特定していた。授業中に私語していた学生にチョーク箱（木製）を投げ、その前列の女子学生にあたり、驚いて泣きだすと、「すまん、すまん、チョークを投げるつもりだったんだがや。君じゃないんじゃ。後ろの男子なんじゃ」と顔を真っ赤にして詫びていた。大学院の授業『経義述聞』は20分遅れ、10分早く帰るのが常で20分は雑談だった。或る時Y君が「僕は高い授業料を払っているの、授業をして下さい」と言うと、「わしは学談してるんだがや。分らん奴は出ていけ」と怒鳴っておられた。今、自宅の仕事部屋で先生が揮毫して下さった「実事求是」の扁額が私をにらんでいる。（拙考「加藤常賢一略歴とその学問」『二松学舎の学芸』2010年。「家井眞が語る加藤常賢」『書道ジャーナル』2010年参照）

橋川時雄先生（醉軒、1894～1978）からは、『芸文類聚』等の類書を資料として使うと便利であり必要だ、研究対象を好きになって楽しまなければ本当の研究は出来ないことを教わった。「陶淵明が貧乏なわけがありません。地主ですから。こっちからあっちまで馬で2日もかかるんですから。ファファファ。貧乏だ貧乏だって、あれは遊びですな。ヒッヒッヒッ、とても楽しそうだった。新入生の時、校舎に入ろうとしていると風呂敷包みを持った背の高い老紳士が、「君、一緒にションベンしましょう」と言うや、校舎の板壁に放尿を始めた。また、授業が終わった後、A君が「これ見ろや」と困った顔でノートを開いて言う。そこには先生の抜けて飛んだ黄色い歯があった。先生に書いて戴いた色紙は天袋にしまっている。

石川梅次郎先生（濯堂、1909～2003）には、中国古

典を厳密に訓読することの必要性、訓読は翻訳技術だから完全にマスターせよ、ついには調子で読むのだと教わった。学部時代4年間毎日曜日先生のお宅へ通い、『毛詩伝箋通釈』を読んでいた川久保広衛氏の後、『史記』を読んで戴き、私の漢文訓読はここで鍛えられた。毎回昼食と夕食を御馳走に為るのが楽しみだった。困った事は、私が弟子の中で最年少の為、書庫の根太が折れたといっでは床下にもぐらされ、雨が降って雨漏りがするといっでは屋根に登らされたことで、川久保氏から「おい、先生の家まで来いよ」の電話が恐かった。先生が書いて下さった自作の漢詩が実家の床の間に飾ってある。

赤塚忠先生（1913～1982）からは、中国古典を読む場合、第一次資料即ち甲骨・金文等で実証することの大切さと面白さ、古代文学・思想は総て文化史に統合し、総合的に研究しなければならぬことを教えられた。その為極めて広範囲の学問を要求された。先生には大学院の5年間、毎月3000円ずつ「おこづかい」を戴いていたが、或る時3000円と一万円札を出し、「どっちを取る？」と聞くので躊躇することなく一万円札を取った所、「さて、さて、それを取られるとわしが旺文社に行けんだろう」と、一万円札を取り返された。合宿について行った一日目、ゼミ生が予習をしておらず、「わしは勉強もせん奴につき合う程暇はない。明日帰る。後は家井君が見とけ」と激怒した。翌朝本当に帰ると言うので駅まで見送りに行って「先生財布を出してください」と願い一万円を残して全部戴いた。電車の中の先生の顔は今思い出しても楽しくなる。先生が書いて下さった「涼」の扇面を大切にしている。（赤塚孝雄・池田知久・戸川芳郎・松丸道雄・家井「先学を語る―赤塚忠博士」『東方学』126輯、2012年参照）

学部・大学院・職場を通じて大変お世話になった先輩に川久保広衛名誉教授（1934～）がいる。「川久保さん」は駘蕩とした人で、決して己の苦しみや怒りを表に出さなかった。古典と併せ武田泰淳等の小説を読む楽しさを教えてくれ、時々小さく褒めて下さった。私にはそれがとても嬉しかった。

まだ書き足りぬことがこの100倍もあるが、已に紙数を超過した。二松学舎の思い出は、私にとっては人との思い出に尽きる。ここで学び、職に就き、まもなく定年を迎える。特に優れた人々に出会え濃密ではあったが、程よい距離を保ちつつ関係を持てたことは私にとって生涯の幸せであった。

境界を越えて、つながっているということ

文学部 国文学科 教授 瀧田 浩

毎月最終土曜日の深夜にEテレで放送している、「新世代が解く！ ニッポンのジレンマ」という討論番組を録画して欠かさず見ている。1975年以降に生まれた者に限定されている出演者は、現在52歳の僕よりもみんな年下。20代・30代のしなやかに現実に働きかける知性に触れて、いつも刺激を受ける。「俺もしっかりやろう」とポジティブになる。

毎回異なる魅力的な若き論客の中でも、2014年11月のWEB2.0の回に登場した、情報学研究者にして起業家でもあるドミニク・チェン氏は特別だった。柔らかい物腰、時々鋭いまなざし、低く響く声、ふところの深い思考、ぶれない論理。日本語は堪能で、日本人としか見えない。「こんな人、日本人にいいのか？」と驚いた。インターネットで調べたし、彼がコメンテーターをする曜日のNHKのニュース番組「NEWS WEB」も毎回録画して見た（ここでの彼はいつも微笑を浮かべ、優しく啓蒙的だった）。彼の父はベトナム出身の台湾人で、フランス国籍を取った人。本人は東京生まれで、中学・高校をフランス、大学をアメリカ、大学院を日本で過ごした（国籍はフランス）。日本におけるクリエイティブ・コモンズ（著者の許諾により著作権を自由化するための国際的非営利組織）の立ち上げの中心に彼がいたことなどを知った。

彼の書いた本が読みたくなり、最も氏の思考と活動の核心に迫れそうな『インターネットを生命化するプロクロニズムの思想と実践』（2013年、青土社）を買った。傍線を引きながら、丁寧に読んだ。彼の経歴同様に、境界を大胆に跨ぎ、横断してゆくユニークな本だった（「攻殻機動隊」や漱石の引用もある）。本書のもくろみは、瞬時に流れ去るインターネット上の情報や、インターネットの向こうでつながるのっぺりとした想像できない相手に、生物ならすべて刻まれているプロクロニズムを読みこもうとすることだ（「プロクロニズム」は、人類学者グレゴリー・ベイトソンの用語で、ドミニク・チェン氏はこれを「生命の来歴がその形態に刻まれること」と定義している）。インターネットを自然と同じ属性をもつものとみなすことで、価値を反転させ、人間が人間性を

回復し、人間同士が再び結びあうための切り札としようとかえ、彼は考えているのだ。

彼はすばやい実践者でもある（本書の後半は実践報告）。日常的なへこみを匿名で誰かが書き込み、他の誰かがなぐさめの言葉をかけ、やわらかく解消（「成仏」）させるユニークな仕組みのインターネットサイト「リグレット」や、素人が音楽リミックスを愉しく体験するためのサイト「AVMII」などが紹介されている。僕はリグレットである人のへこみをなぐさめて「ありがとう」の言葉をもらいほっこりし、リミックスも試して家にいながらにして得られるアートの高揚感も経験した。

著書の鍵概念「プロクロニズム」をもっと理解したいなと思い、ベイトソンの主著の一冊『精神と自然 生きた世界の認識論』（佐藤良明訳、2006年、新思索社）を買って、精読した。翻訳だとピンとこない概念や文脈もあるので、インターネット上で読めた原書の英文も時に参照した。少し経って、他の鍵概念「オートポイエーシス」も気になり、フランシスコ・バレーラらの著書『知恵の樹 一生きている世界はどのようにして生まれるのか』（管啓次郎訳、1997年、ちくま学芸文庫）も、同じやり方で読んだ。どちらも一度の精読だけですべて理解できる内容ではなかったが、示唆はたっぷりと受けた。僕の専門領域（日本近代文学）にもつながってきたのがわかり、うれしかった。

今の学生に接していると、好奇心が既成の枠組・領域内にすっぽりと収まり、外側へ超えて行かないという印象が強い。また、好奇心は趣味の領域で作動させ、学問は「お勉強」のモチベーションでおこなうものと決め、精神の完全な分業化をおこなっている者も多い。学問はあてがわれた課題をこなすものではない。好奇心（やアートで感じる高揚感）を学問と接続させ、「？」を抱きしめて、つながって現れてくるものについて生き生きと考え続けることが一番大事だと思う。そんな思いをこめて、「僕はこんなふうに愉しくやっているよ」という一例を書いた。

私と図書「缶」

国際政治経済学部 国際政治経済学科 教授 佐藤 晋

皆さんはホテルに缶詰になるということを聞いたことがあるだろうか。締め切りに迫られた作家や小説家が、世の中の雑事に惑わされず原稿執筆に集中するためにホテルにこもるあれである。編集者に強制されてこもる場合もあれば、自ら自主的にこもる場合もある。

私は、これを図書館でやったことがある。ある夏の夏休み、日本語はもとより英語も目にも耳にも入れないようにして、フランス語だけと接触する状態にしたかったため、朝から夜まで図書館にこもった。実は大学院の修士課程から博士課程に進学するためには外国語2科目の出題を解いて試験に合格する必要があった。私の場合、第2外国語はフランス語だったため、英語に加えてフランス語を勉強する必要があった。しかし、学部2年生の時に必修があったきり、3年間以上遠ざかっていたため、もはや全く理解できない言語になっていた。そこで、フランス語の講義を履修し、その先生に勉強方法を教えてもらった。一つは文法のテキストをアメリカの中学生がフランス語の授業で使用しているものにするのであった。フランス語の文法のうち英語と同じ文法は省略されているので、日本語で書かれた日本人向けのテキストよりも本の厚みが薄くなる。これがやる気につながった。次に、試験問題が和訳のみであったため、文章を読んで意味を取ることに集中した。そのテキストにはフランスの世論調査会社の出したレポートを勧められた。これは順を追うにつれて、簡単な文章による問いから、複雑な文章による難解な質問へとステップアップしているからだ。

その次の段階の勉強方法は自分が考えた。まず英語の勉強と同時にやっているために、フランス語の上達が遅れる感じがしていた。そこで、もちろんフランス語の能力の方が相当低かったので、英語はしばらく忘れてフランス語だけをやろう、ついでに日本語も一定期間忘れようと、図書館へこもることにした。フランス語の辞書だけを持って朝9時に図書館に着くとフィガロ、ルモンドといった仏字紙から、世界を騒がしているメジャーな

ニュースをコピーして、閉館までひたすらその記事を読んで和訳していった。家に帰ってテレビニュースを聞くと、そのトップニュースをアナウンサーが日本語で喋ってくれる。その内容が自分のやった翻訳と合致しているのかをチェックして就寝する。この繰り返しであった。すると次第に上達してきたのか、ニュースの翻訳量もその翻訳の正確さもアップしてきた。ただ、自分が10時間くらいかけて訳した文章が、アナウンサーの手にかかるものの20秒で話し尽くされることには心が折れかかった。が、それは仕方ない。

最後の仕上げはフランス語と英語が対訳の形になっている政治学辞典のフランス語を日本語に訳すことであった。これがあるかは英語部分を見て判断する。項目は「民主主義」「ナショナリズム」「ファシズム」「社会契約論」などを選んだ。これは入試問題を政治思想分野の先生が出題することが予想できたからだ。また政治学特有のテクニカルタームのフランス語を覚える必要があったためだ。

こうした「図書館でもり」のあと、秋口に受けた試験ではフランス語の文章をほぼ完全に訳すことができた。しかし、この時同時に受けた英語の和訳も以前よりスラスラとできたことが未だに謎である。英語はこの一ヶ月間全く読んでなく、実は一抹の不安を感じていた。しかし、フランス語を読むことが英語の読解力の向上につながるという全く予期していないことが起こったのだ。ノルマン・コンクエストでフランス語から多くの単語が英語に入ったこと、日本語に比べると英語とフランス語の距離が近いことが理由だと思われる。さらに、テレビもなくおしゃべりもできない図書館という環境に自らを閉じ込め、日本語から自分を遮断したことが功を奏したことになるのであろうか。図書館には、周囲と自分を遮断するという機能も備わっている。



ゼミ発表・グループ学習・模擬授業 どんどん使おう！電子黒板

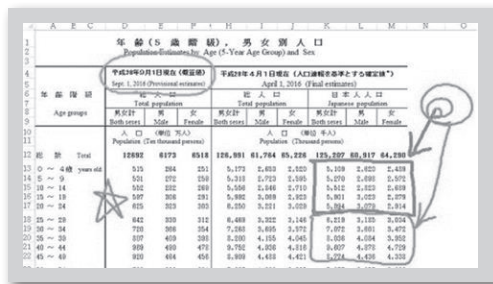


今年7月に開催された「明快！速効！プレゼンのコツ」セミナーで、プレゼンテーションルーム内にある機器の利用方法を説明したところ、参加された皆さんから最も強い関心を寄せられたのが**電子黒板**です！
今号では、その便利な使い方をほんの一部だけご紹介します。



プレゼンテーションルーム後方に設置

●PC画面の拡大&書き込みができる

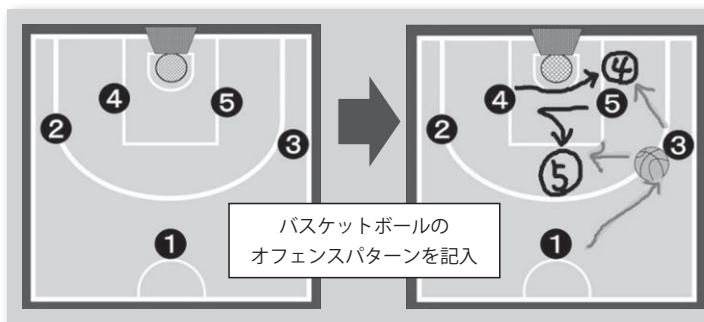


Excel、Word、PowerPointなどで前もって作成したファイルをUSBメモリに保存し、備え付けのパソコンからファイルを開いてください。電子黒板に拡大表示され、メンバー全員で情報を共有できます。重要事項には備え付けのペンで色分けしてマーキング。話し合いながら、手書きで修正を書き込むこともできます。



画面に手書きでマーキング

チームスポーツの
作戦会議にも使えるよ



バスケットボールの
オフenseパターンを記入

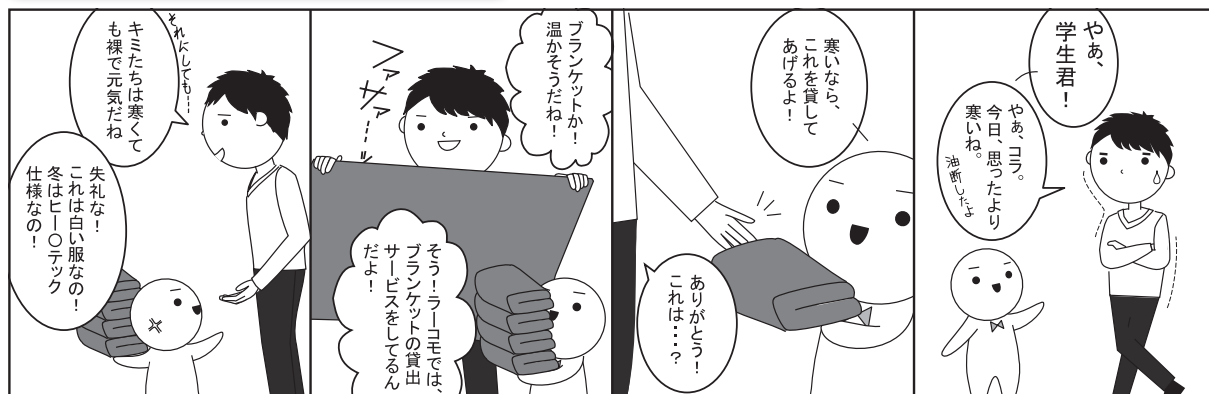
●大画面でWeb資料をグループ閲覧



備え付けのパソコンでインターネットを立ち上げ、図書館サイトからデジタル資料を検索し、メンバー全員で意見を交換しながら読むこともできます。

コレ便利

画面をそのまま
USBメモリに
保存できる！



おまけのコラム
「プリンケット貸出の巻」

特報！



1F・2FのノートPCが、受付カウンター横のプリンターに接続しました！
A4モノクロの片面印刷が可能です。（一人20枚以内）詳細は、館内掲示にて！

北京図書館訪問記

図書館スタッフ 阿部晋一郎

10月19日（水）から22日（土）まで、中国・北京の図書館や書店を巡る研修に参加する機会を得ました。簡単に報告をさせていただきます。

○中国国家図書館

中国唯一の国立図書館です。1年中休みはありません。こちらの図書館は日本と同様納本制度があります。3冊納本され、そのうち2冊は書庫の閲覧用、1冊は貸出用の本になります。貸出用の本が破損した場合には、その本は処分され、貸出用の本がなくなることになります。修理をしてもう一度使うということはないそうです。

その一方で、古籍の修理に関しては政府主導で全国にネットワークが整っており、国家図書館は各地の図書館にアドバイスをする立場にあるそうです。ついでながら、修理の最高級の素材は日本の和紙になるそうです。

その他にも新聞や雑誌がデジタルで閲覧できる場所があるなど、多くのことを見聞しましたが、特に上記2点が印象に残りました。

○北京大学図書館

中国最大級の大学図書館です。館長自らミーティングで説明をしていただきました。こちらで印象に残ったのは「組織化」という言葉です。北京大学は全部で40の分館があり、すべての分館が本館と同じシステムを利用することで、本館と分館で不一致が生じないようにしているとのことでした。ただ、この組織化には14年の歳月がかかったといいます。

こちらの図書館は「世界一の図書館」を目指しており、なかでも資料のデジタル化はかなり進んでいます。現在古籍館が雨漏りをするため、古籍資料の引っ越しが行われており、そちらの資料を閲覧することはできませんでした。古籍資料が引っ越すと、本館の改修工事が始まるそうです。

○首都図書館

北京最大の公立図書館です。こちらの図書館は独自のアプリを開発し、自宅から図書館の本を閲覧できるそうです。24時間いつでも図書が貸出、返却できる「自助図書館」（右写真）という無人図書館が町中にあり、その機器用のOPACもあります。資料は首都図書館が提供し、

その更新は図書館スタッフが行います。巡回スタッフもいるそうです。「セルフサービス」という習慣がない人々に普及させるには、一対一で対応しなければならないなど、大変な苦労があったそうです。

こちらではその他に児童教育のイベントを各国大使館と協力して行ったり、中国伝統文化に関する内容の本を動画化して児童に見せたりするなど、児童に対してのサービスも充実していました。

○ポプラ絵本館

中国初の絵本専門店です。開店前に店長よりお話を伺いました。書店ではありますが、中には親子がくつろげるような空間が用意されており、一日中居られる場所づくりをしていました。書店自体は船をデザインとして、絵本の海の中にいるようにというテーマを設けているそうです。イベントも多彩で、読み聞かせはプロに依頼したり、絵本劇を行ったり、屋外へ昆虫採集に行くという活動などがあったりします。絵本のギフトセットを販売するなど書店としての役割と、上記のようなイベントをして、読書の習慣づけに貢献している場所でした。

その他にも北京最大級の書店や、大自然の中に佇む書屋なども訪問でき、非常に充実した時を過ごすことができました。普段は気軽に入ることのできない異国の図書館を見学でき、貴重な経験をすることができた4日間でした。



町中の「自助図書館」

本学教職員著書紹介

『浄土真宗と近代日本 東アジア・布教・漢学』

川邊雄大 編（勉誠出版 2016年3月発行）A5 上製函 551 ページ 8,000 円＋税 ISBN：978-4-585-21032-0

本書は、科研費「北九州の真宗を例とした仏教近代化に関する基礎的研究」（平成 24～26 年度、基盤研究 C、No. 24617018、研究代表者：川邊雄大）の研究成果を出版したものである。

筆者をはじめ、町泉寿郎本学教授や中村聡玉川大学教授（本大学院出身）など合計 6 名で論考 11 篇を執筆したほか、附録・資料篇として善教寺（大分県佐伯市）に所蔵される、小栗憲一旧蔵の「真宗法難事件」関係資料など 8 篇を翻刻し解説を附した。

本書では、幕末明治期の浄土真宗がおかれた状況について、東アジアという広い視点で、浄土真宗と近代日本とくに政治とのかわり、漢学が僧侶の学問と人脈形成に果たした役割、海外布教の実態と現地における交流について検討した。研究範囲も宗門内に限定せず、執筆者各自が九州各地で調査蒐集した新資料を用いて、浄土真宗と漢学塾・咸宜園やキリスト教、さらには明治新政府や清末文人との関わりについて論じた論考を多数収録しており、いずれも従来の真宗研究にはなかった視点を取り入れたものとなった。

筆者は第二部・第三章「幕末明治期の真宗僧と漢学―咸宜園から東京帝国大学へ―」、第四部・第一章「明治期の琉球における真宗法難事件」、第二章「明治期における東本願寺の清国布教」、第三章「『東瀛詩選』編纂に関する考察」および資料翻刻を行った。

真宗僧の学問について、従来は仏学・真宗学を中心に論じられてきた。本書では真宗僧の学問やその養成機関であった学寮・学林について、漢学という視点から論ずると同時に、咸宜園出身の僧侶がその人脈を利用して明治新政府や清国の要人に接近していった点についても明らかにした。

また、明治 10 年（1877）に、当時浄土真宗を禁止していた琉球藩庁が、秘密裏に信仰を続けていた真宗信徒を逮捕・処罰した「真宗法難事件」は、これまで資料・研究は必ずしも充分ではなかったが、本書におさめられた論考や翻刻資料によって、事件の詳細が明らかとなり、今後研究を進めるにあたって基礎資料となり得るものと思われる。

（文学部 非常勤講師 川邊雄大）

新着図書 おすすめの 1 冊

福嶋聡著『古典について冷静に考えてみました』 岩波書店 2016 年 9 月 【請求記号】 902- K

古典という言葉が辞書で引くと、「古い時代に著された立派な内容の書物」、「過去の時代に作られ長年月にわたる批判に耐え伝えられた現代でも文化的価値の高いもの」とあり、「立派な書物」、「文化的価値が高いもの」とは何かと思わず考えてしまいます。

この本は 12 名の古典研究者が異なるそれぞれの専門分野、日本文学だけでなく西洋文学、宗教、演劇など様々な面における古典について述べたもので、古典の意義について、成り立ちについて、多様さについての三部に大きく分けられた構成になっています。日本で有名な物語の一つである『源氏物語』がどのような経緯を経て古典と見なされるようになったか、メソポタミアで生まれたマニ教の絵画が古典にもたらす影響についてなど、200 頁余りの紙幅の中にとっても広い視野をもって古典というテーマを見渡すことができます。古典について学んでいる方も違う視点を知ることができ、またあまり親しみがない方も興味を引かれるポイントが散りばめられていて、発見に溢れた本であると思います。

辞書にあった古典の「立派な書物」、「文化的価値が高いもの」という定義を研究者たちが見ている「古典」で補うと、また見え方が違ってきます。ぜひこの本を手にとって、古典の世界に触れてみてください。（S）

二松学舎140周年記念

文豪・夏目漱石のアンドロイド「漱石アンドロイド」が完成 ～日本初、授業を行うアンドロイドを目指して～



この度、学校法人二松学舎（理事長：水戸英則）の二松学舎大学大学院文学研究科と国立大学法人大阪大学大学院基礎工学研究科（石黒研究室）との共同研究で製作した、文豪・夏目漱石のアンドロイド“漱石アンドロイド”が完成し、平成28(2016)年12月8日に本学三島中洲記念講堂において完成披露記者発表を行いました。これより、講義、外部講演、朗読などのプログラムの開発を予定しておりますが、このプロジェクトを進めるにあたって、本学ではより多くの方と一緒に“漱石アンドロイド”を作り上げていきたいと考えています。

夏目漱石と二松学舎（創設者・三島中洲）との関わりは、今から135年前の明治14(1881)年に漱石が漢学塾二松学舎に入塾したことによります。

入塾した当時の様子が、漱石の「落第」[『中学文芸』1巻4号、明治39年6月20日]に「面白くもないし二三年で僕は此中学を止めて終つて、三島中洲先生の二松学舎へ転じたのであるが、其時分此処に居て今知られて居る人は京都大学の田島錦治、井上密などで、此間の戦争に露西亜へ捕虜となると行つた内務省の小城なども居つたと思ふ。・・・（中略）・・・机などは更にない。其処へ順序もなく座り込んで講義を聞くのであつたが、輪講の時などは恰度カルタでも取る様な工合にしてやつたものである。・・・」と掲載されています。これは同窓や当時の二松学舎の授業風景を窺い知る貴重な資料でもあります。この「落第」は『漱石全集 第二五巻』に収録されていますので、ご一読ください。因みに神奈川県立近代文学館には漱石の「二松学舎修了証書」が収蔵されています。

本学は、平成29(2017)年10月10日に創立140周年を迎えます。それを記念して様々な行事を予定しています。その一環として同年秋に「夏目漱石展」を開催する予定です。奇しくも漱石生誕150年の年にあたります。

この展覧会には、今年1月に記者発表し、テレビ・新聞等で漱石の未発表作品として広く報道されました「夏目漱石漢詩文屏風」をはじめ、本学が所蔵する書・絵・漢詩・俳句等の漱石直筆作品、及び『吾輩は猫である』『こころ』『三四郎』『それから』『門』『明暗』などの初版本を展示する予定です。詳細につきましては、本学ホームページ、ポスター、「季報」等でお知らせしますので、ぜひ高覧のほどお願いいたします。



編集後記

季報98号をお届けします。

原稿を執筆いただいた家井先生、瀧田先生、佐藤先生、著書紹介をして下さった川邊先生に御礼申し上げます。

在りし日の先生の姿、勉強法や図書館活用法の一例など、バラエティに富んだ内容になったと思います。

ぜひご一読ください。

(S・A)

二松学舎大学附属図書館

季報

第98号

発行日 平成28(2016)年12月20日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

電話：03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ

電話：03-5227-8333